異世界(。´・д・)エッ

CAT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界（゜´・д・）エッ

【Ｎコード】
Ｎ０３０５Ｚ

【作者名】
ＣＡＴ

【あらすじ】
異世界に迷い込んだ九十九（つくも）めんどくさがりな彼は楽しい異世界ライフを満喫する為にチート能力と補正で様々な問題を解決していく物語まあとはいっても彼元々地球でもおかしな人間なんだけどね
残酷描写ありってことにしてるけどどうなるか

やっぱ補正だな

俺は目を覚ますとそこは森の中だった・・・

「ここどこだぁー」

まあとりあえず叫んでみる

「・・・」

うん、だれもいないてか昨日俺は自宅のベットで寝ていたはずなんだけどな

「まあ、いいか」

あれか・・あれなのか・・

まずはじめに俺は右手の拳を握り締めちょっと力を込めて近くの木を殴ってみた

ドゴーーーン

殴った木は木っ端微塵に

次は飛んでみるかなと

俺はかるーくジャンプしてみると

うんうん

約１０メートルぐらい飛んでいた

あ・・・これ着地痛いかも

ド──ｍ９（＊、∀、＊）──ン！！

ふぅ大丈夫みたいだな

やれやれやっぱ肉体が強化されとるな

俺はストレッチしながらとりあえず歩き出した

森を適当に歩く俺の前に悲鳴が・・・

聞こえてこなかった

人が通る道に出たのはいいけどだれもいないって

まあ異世界じゃそうなんだろうな

「おい、餓鬼金目の物だしな」

山賊さん３人が俺に声をかけてきた

「はぁ最初に出会ったのが山賊ってかわいい女の子にして欲しかったわ」

「なにいって・・」

めんどくさいので俺は山賊さんが何か言う前に動いた

ぐだぐだいらん言い合いしても結局殺すことになるんっだし無駄無駄

俺は山賊の一人が腰にさしている剣を奪うと彼らの首を切り落とした

え、人殺すのに躊躇しないかって

うん、言ってなかったな俺元傭兵だし地球でねｖ（、ゝω・´）キャピィ☆

とりあえず彼らの体を探ることに

はぁほんと貧乏だな、まあ金がないから山賊なんかしてたんだろうけど

三人合わせて銀貨３枚に銅貨２４枚って価値わからんけどきっと少ないな

まあないよりましか、俺は彼ら剣二個を奪いまた歩き出そうとした

「死ね山賊」

いきなり鎧を着た騎士風の女に切りかけられた

まあ避けたけど、てか山賊の死体を漁って山賊に間違われるって

というかいきなり切りかかるなよな

「いきなり切りかかるなよ俺は山賊じゃねーし」

「貴様死体からなにか奪っていたではないか」

「襲われたから返り討ちにして金目の物もってないなかって探ってただけだろ」

「それは冒険者がすることか」

「いや俺冒険者じゃないし」

「やはり山賊か」

「はぁ（、・д、・）ウザ・・」

めんどくさいからかるーく気絶させてみた

うん　いい感じで気絶

「き、、貴様」

なんかすっごい睨んで何か言おうとしてたな

嫌いきなり襲ってきた奴にそんな目で見られても

とりあえず道に彼女を置いていくのもなんだし誤解解く前に町まで言ってがーがー

言われるのもめんどくさいので彼女を担いで森に戻ることにした

女騎士

さてこれからどうしようかな

森に戻った俺は

女騎士さんの荷物から紐を取り出し木に縛ってみました（・∀・）

ニヤ

近くに川があったので山賊を殺した返り血を洗い流して戻ってみると

女騎士さんが目を覚ましてこちらを睨んでいます

うんうん、そりゃ睨むよね

ああ口には布かませてるよ、だってなんかしゃべられたらうるさいし

「さて女騎士さん、俺は九十九今から君に聞きたいことあるから布とるよ大声とか出さないでねべつになにかするってわけじゃないから」

女騎士さんはなんか頷いてるので外してみる

「君の名前は」

「私はセリアだ、冒険者だ今に仲間が助けに来るぞ早くこの縄を解け」

「えーーとそこはまあ聞いてないけど、そうなると君を殺さないと

いけなくなるな」

「な。なんで貴様」

「君が死ねば問題ないだろ目撃者もいないんだし、てか君は俺の質問にだけ答えればいいんだよ」

剣を彼女の首元に当ててみた

「まあ殺す気はないんだけどね、俺は旅人で元傭兵で今は迷子で道に迷っていたところ山賊さん達に囲まれて仕方なく殺したんだよ」

まあ本当はめんどくさいから殺したんだけど

「それでこの近くに町ってあるの」

（o゛・∀・、o）ニコッ♪って感じで聞いてみたんだけど

彼女は睨みながらだまってしまった・・・

「んーしゃべってくれないと困るんだよね」

「・・・」

ガサガサ

音がしたので周りを見てみると

なんか知らない間に狼ぽぃ生き物達に囲まれていた

「はぁめんどくさいな」

「お前、ブラウンファングの群れだぞ早く私の縄を解け殺されるぞ」

彼女がなんか言ってるけど無視して俺は持っていた剣をかるーっく

水平に振り抜いてみた

やっぱできたかてか剣が折れてる木ごと狼もどきを切ったからな

彼女は目が点になっている

「で、話の続きなんだけど近くに町ってあるのかな」

「いや、お前その前に今のはなんだ」

「質問してるの俺なんだけど・・・」

彼女はなんか睨みながらも答えてくれた

「北に3時間ぐらい歩けばベルーラの町に着くはずだ」

「そっかそっかようやく話が出来た、じゃあ次の質問君冒険者って

いうけど冒険者はだれでもなれるのかい」

「そんなことはだれでも知っているだろう」
「いや俺はべつの大陸から着たから冒険者っていうのわかんないんだよね」
たぶんギルドとか登録したらだれでもなれるんだろうけど一を聞いてみた
「そうか、冒険者ギルドで登録したらだれも冒険者になれる」
「そっかそっか、ありがとそれじゃ」
歩いて立ち去ろうとする俺を見て
「お前待て私をここにおいていくつもりか」
俺はしばらく考える振りをしてから
セリアの縄解く
「あ、でも襲ってきたら殺すからねV（、ゝω・´）キャピィ☆」
彼女にそういうと俺は彼女を縛っていた紐を剣で切ってあげた
さて町まで行くかな
「まてまてお前私の武器と荷物を返せ」
「え、突然襲ってきた君がなにを言ってるの生きてるだけいいじゃ

ん」

「そ、それは貴様が怪しかったからだろ今でも怪しいが」

俺はしかたなく彼女を連れてだってベルーラの町へ向かうことにした

セリアが仲間になった？

俺は女騎士ことセリアとふたりベルーラの町へ向かった

まあ彼女がうそついてる可能性もあるからこれでいいんだけどね

「・・・」

「・・・」

無言だ３０分ぐらい歩いてるんだけどセリアは無言だ

「セリカってＢランクなんだ結構強いんじゃない？」

「なぜ、貴様がそんなことを知っている」

「いや、君の荷物の中のギルドカード？に書かれてるから」

「私の荷物を返せ・・　・」

「いやもう俺の出し・・・でも返してあげてもいいよ」

「本当か」

本当は返そうと思ってたんだけどなんだが生意気だったし

「ただし条件がある」

「条件だとそれは元々私の物だぞ」

「嫌ならべつにいいよ」

「わかったその条件というのをとりあえず聞いてやろう」

なんかさっきから偉そうなんだよな武器も持ってないくせに

俺が取り上げたんだけどね（。´ｐｑ）クスッ

「俺迷子だって言ったよね、だから町で教えてもらいたいんだよね」

「それは私に従者になれってことか」

「ん、いやしばらくの間、町で生活する事になると思うから教えて欲しいんだよね」

「それだけでいいのかというか私が町に着いたらお前を捕まえるとは思わないのか」

「ん、そんなことしたら君間違いなく死ぬよ、それでもいいなら俺を捕まえようとしてもいいけど」

「・・・わかった条件を飲もう」

彼女が首を縦に振ったと同時に俺は彼女の剣と荷物を投げて渡してあげた

というか武器と荷物重くはないけど邪魔だったんだよね両手ふさがるし

「あ、ありがと武器までいいのか」

「邪魔だし俺まだ山賊から奪った武器もあるし一本だけだけど、それに力量ぐらいわかるだろ」

それにしてもあれから2時間近く歩いてもだれともすれ違わないな

山賊とか出たらめんどくさいけど、そんなことを考えながらベルーラの町が見えてきた

「あれがベルーラの町だ九十九」

「おう、まあ見ればわかるけどなセリアがいってたし」

それにしてもセリアって可愛いよな髪の毛は真っ赤で瞳はくりっとした真っ赤

鼻もすーーとしてて顔も整ってるしスタイルもいい胸は鎧で隠れちゃってるけど

さらしでも巻いてるのかな（，・ω・、）

「わ、わたしは胸もあるぞ」

「Σ（・ω・ノ）ノえっ！声に出してた、っていうか否定するとこそこそこなの」

なんか頬が赤くなってる気がするけどどうなんだこれ

異世界の女性はそういうものなのかもなっと思いながらベルーラの町へたどりついた

ギルドだよ

「ここが冒険者ギルドか」

俺は巨大な建物の前に立って呟いた

ベルーラの町についてギルドまで向かう途中いろんな人がセリアに声をかけていなぁ

おばちゃんおじちゃん冒険者風のおっさんに兵士ぽぃ奴までセリアって有名なんだなたぶん

「九十九早く行くぞ」

そういって建物の中に入っていくセリア

建物の中に入るとそこはイメージしていた酒場ではなくどこぞの役所ぽかった

「セリアさんお帰りなさい今日は街道にでる賊の討伐に行ったと思ったんですか、もう終わったのですか」

と猫耳の受付がセリアに話しかけていた

「あ、そうだった私がついた発見した時に賊は死んでいたんだが証拠かぁ」

セリアは頭を抱えて黙ってしまった

「おいセリアこれ証拠になるか」

俺は盗賊の死体から盗んだ財布の中に入っていたギルドカードぽぃのをセリアに手渡した

「おぉカード持ちだったのか、それでかまわない」

そういうとセリアは俺からカードを受け取ると受付の猫耳に手渡した

「ちょっと調べますね」

猫耳はカードを受け取ると読み取り機？かなにかに当てて確認していた

「確認できました依頼達成ですセリアさんギルドカードをお貸しください」

「あ、ちがうエミリア賊を退治したのは私ではないそこにいる男だ」

「え・・」

驚いた顔してる猫耳は俺の方を見てる

「失礼しました、それではえーとギルドカードをお貸ししてくださいますか」

「いやもってないけど」

「それでしたら身分証明カードを」

「いやもってないけど」

「・・・」

「・・・」

見つめあう俺と猫耳

猫耳さわりたいなふわふわしてるのかななんて考えていたら横からセリアが話し始めた

「エミリアすまんこの男別の大陸から来たらしいのでギルドカードはもってない、今作ってもらえないだろうか」

俺から目線をはずした猫耳は机の下から一枚の紙を取り出し俺に渡してきた

「あ、はいわかりました、それではこちらに記入をお願いします、名前年齢性別その他に技能などありましたら記入を」

俺は猫耳から紙を受け取るのφ（・ェ・o）書き始めようと思って気づく

言葉はなんかしらんけど通じるけど文字も読めるが俺こっちの字わからんぞ

俺はセリアの方を向くと

「セリアこっちの字読めるけど書けんぞ変わりに書いてくれ」

「そうか九十九は字が書けないのか」
なんか勝ち誇った顔で見られた気がした
「いやこっちの字が書けないだけだからな」
「うんうんわかってるわかってる私が書いてやろう」
「なんか腹立つな」
そういってセリアに代筆してもらった
俺が殺した賊は元冒険者だったが素行が悪く冒険者だけでは食っていけなくなり
賊に身を落とし街道で冒険者や商人を襲っていたらしい先日賞金首として依頼を出したところ
セリアが依頼を受けて今日早速向かったところ俺をその盗賊と勘違いしたってことらしい
登録用紙を渡して水晶に手を当てたら登録完成ギルドカードに賞金の銀貨３０枚をもらえたので
俺は満足してセリアと別れてギルドからでたのだった
微妙にオーバーテクノロジーなところがあるんだよな
そうそうギルドのランクは最初はみんなＥランクらしいのだが俺はＣランクってことになっていた

どうやら賞金首の討伐とセリアが推薦したって形でそうなったらしい
規約などめんどくさいことは聞いてないだってめんどいし
冒険者ギルドからしばらくセリアから聞いた宿屋に向かって歩いていると
案の定後ろから付けてくる奴らの影がまあギルドの中でこっちを睨んでるあほな奴らがいたのに
気がついてセリアと別れて路地裏までおびき出したんだけどな
「で、お前ら俺になんかようか」
そういうと隠れていたあほ共が5人も出てくる
冒険者っていうかただのヤカラだよなあれ
普通に剣とか斧とかもっとるしゞ（ε－ｏ）ォィォィ新人いじめとかじゃないなこれ
一人の男が俺の方を見て
「兄貴を殺したのはお前か」
ああ、なるほど賞金首って言っても元冒険者だもんな仲間がいて当然か
「ああ、賞金首を殺したのは俺だがお前の兄貴だったのか」

めっさ睨んでる全然怖くないけど

「兄貴の仇取らして貰うぞ」

「はぁ、なんで賞金首殺して敵討ちされなくちゃいけないんだよ、めんどくさいわ」

「やろう共行くぞ」

そういうとあほ共は武器を振りかぶってまっすぐ俺に襲ってきた

ｏ（ｰ・д・/）ｏ　ウン！！あほだ

勝てるとでも思ってるところがあほだこれならチート能力なくても殺せるわ

ちっとは考えて襲えよな

まあめんどくさいからいいけど

新人イビリぐらいだったらかるーく痛めつけて終わりにしてやったのに

敵討ちって言うからなこれは殺さないとだめだな

まあいいか、そういうと俺はあほ共の攻撃？をかるーくジャンプしてかわして

山賊から奪ったもとい賞金首くんから奪った剣を上から弟君に振り

落とした

ぐちゃ

うわー気持ちわるぅ

こういうときは人間だと思っちゃだめだ、あほだあほ俺が殺したのはあほあほ虫だ

うんうん、これは俺の持論だが殺した相手を自分と同じ人間だと思っちゃいけない

なぜならそう思うと罪悪感が体に頭にこびりついてしまい精神を病むからだ

さぁーーてほかのあほ共も殺すかな

っていない、、考え事しすぎた

まぁでもいいかこれでまた襲ってくるようならすごいしな

さぁーってどうしようかなセリアにはギルドから出る前に言っておいたし正当防衛なら

殺していいって言われてたからな

「返りに血どうしよう」

まあどうにでもなるか俺はセリアから聞いた宿に向かうことにした

死体？放置ですよそりゃめんどくさいじゃん

カラスでも野犬でもこんな世界だいい餌になると思うよｖ（、ゝω・´）キャピィ☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0305z/

異世界(。´・д・)エッ

2011年12月2日01時48分発行